

〈資 料〉

ある元日本軍「慰安婦」の回想（8）

——吉元玉さんからの聞き取り——

吉 見 義 明

はじめに

本誌38号（2017年2月）でも記したように、元日本軍「慰安婦」のハルモニたちは、もう高齢である。いまのうちに話を聞いておかなければ聞き取りは不可能になると思い、私は^{キルウォノク}吉元玉さんに無理をお願いして、2008年3月31日午後ソウル市内のシムト、ウリチプで証言を聞いた。通訳は、今回も^{ヤンチンジャ}梁澄子さんにお願いした。吉元玉さんは、何度も世界各地に行つて証言している。また、吉元玉「風にまかせ、打ち寄せる波にまかせて、歳月はたってしまった」（西野瑠美子・金富子編『証言 未来への記憶』南・北・在日コリア編・下巻、明石書店、2010年）という2004年にまとめられた証言記録がある。また、「길원옥 할머니 증언 Demonstration Testimony Prepared by Won-Ok Gil」という記録（韓国挺身隊問題対策協議会、2008年、未公刊）もあるが、今回の証言には、いくつかの新しい事実が含まれている。

吉元玉さんの略歴を記しておきたい。

- * 1928年旧暦10月23日、平壤に生まれる（戸籍上の出生年は1927年。平安北道^{ヒチョン}熙川は親の故郷とのこと）。5人きょうだい（男3人・女2人）の4番目。ヒアリングした2008年3月当時は満79歳。父は古物商だった。普通学校（小学校）には数年しか通えなかった。その後、妓生巻番（妓生養成所）に短期間通う。
- * 1941年頃（満13歳）平壤から満洲の軍慰安所に連れて行かれる。
- * 1942年頃（満14歳）性病に感染させられ、帰国。
- * 1943年頃（満15歳）中国の軍慰安所、トキワに連れて行かれる（おそらく河北省石家荘）。ここで、日本の敗戦を迎える。
- * 1945年（満16歳）仁川に上陸し、帰国。
- * 1948年頃、結婚、その後離婚。
- * 1954年頃、妻帯者と同棲。
- * 1958年（満29歳）養子を取る。この子は、やがて大学院を出て、牧師となる。
- * 1998年（満69歳または70歳）、「慰安婦」だったことを申告。

*2012年、金福童さんとともに、世界の戦争下の性暴力被害者などを支援するナビ基金を設立。

今回のヒアリングの中で、もっとも注目すべきところは、軍慰安所に2度連れていかれた経緯であろう。吉さんにはお金を稼ぎたいという切実な動機があり、業者の側はそれに付け込んで、儲かる仕事があると騙して連れて行っているのだから、明らかな誘拐である。軍慰安所での拘束の状況と性病罹患がもたらした苛烈な状況、戦後の苦しい生活の一端も語られている。吉元玉さんは、慰安所時代の記憶を消すことによってなんとか生きていくことができたのだが、他方で、ご当人も語っているように逞しい生活力があつたから生き抜くことができたのだ。それでも、解放後、「慰安婦」だったことが知られることを恐れて生きてきたこと、「慰安婦」問題が浮上して、それが本人の責任ではないこと、多くの同胞が支援してくれることが分かってから、自らの体験を語るようになったということがよく分かる。

ICレコーダーからの文字起こしと翻訳は今回も梁澄子さんにお願いした。その意味で、本稿の作成も多くを梁さんに負っており、成果があるとすれば、その功績は同氏に帰すべきである。全体の構成は私が行った。文責が私にあることはいうまでもない。本文中、「吉」は吉元玉さん、「梁」は梁澄子さん、「——」は吉見の発言であることを示す。〔 〕は梁さん、または吉見による補註である。

末筆ながら、辛い思い出を語ってくださった吉元玉ハルモニと、通訳と記録の起こし・翻訳をしていただいた梁澄子さんに厚くお礼申し上げたい。

*本稿は、日本学術振興会の科学研究費、基盤研究（B）（研究代表者林博史、課題番号18H00716）の研究成果の一部である。

吉元玉さんからの聞き取り 2008年3月31日
シムト「ウリチブ」にて

なぜ語るようになったか

—— ハルモニは、天使のように心が清い方だと梁さんから聞きました。ですから是非お会いしたいと思っていました。すでに何度もお話されたことをまた聞くことになるとは思いますが、どうかよろしくお願ひします。

吉元玉 自身がされたことですが、女性として恥ずかしいので、どうすれば隠せるだろうかと、同じ家で暮らす家族にも分からないように、そんなふう長い年月を生きてきました。でも、それは違うな、と。私はひどい目に遭うだけ遭って、もうこれ以上失うものがない人間だから、恥ずかしくても集会に出なきゃと思って水曜デモに出るようになり、シムト「ウリチブ」〔ソウル市内にあ

る元「慰安婦」被害者が共同で暮らす家〕に入つて来て、昨年〔2007年〕から隠すことなく話すようになったんです。以前、秘密にして話さなかった頃に比べると、今、こうして話すようになって、少し気持ちが楽になりました。外国から来いと言えば外国にも行き、日本から来いと言えば日本にも行きます。

私が言いたいのは、世界中が騒いでいるんだから、日本政府も事実は事実として認めて〔ほしいということ〕。黙っていたからといって、実際にあつたことがなくなるわけではないでしょう？

実際にあつた歴史はなくなりません。私たちが生きている間に、本当のことを話して、賠償すべきは賠償して、そうしなきゃ。〔水曜デモが〕400回越えても、何も言う人がいないんだから、それじゃあ駄目でしょ？ 無視しているわけですが、無視されている側は、13歳の時にひどい目にあつて一

生涯、人間らしく生きられないまま80歳を越えたのに、

その無視されるのが問題ではなくて、今後、次の世代にまで引きずって行ってはいけないんですよ。黙っていたからといって永遠に隠せるものではないんです。力の弱い韓国でも次の世代はいるんです。水曜デモに出れば分かりますが、小学生も出てくるんです。その小学生たちが、「ハルモニ、ハルモニ、心配しないでください。僕たちがいるじゃないですか。ハルモニの代でできなければ、僕たちが謝罪もとって賠償もとります」と言います。そんなことを聞く時には、どんなに寒くても暖かくなって、どんなに具合が悪くても元気になります。でも、そんな子どもたちにも、こんなことで苦勞をさせるわけにはいきません。あの人も、過ちは過ちとして認めて、早く言うべきことを言えばそれで終わるのに、

本当に何人か悪い人がいて、女性たちを性奴隷にしようとしたわけではなくて、戦争時代だったから、私がいつも言うことを知っていますか？戦争のない国、平和の国をつくってほしいということです。私たちのように辛い目に遭わないように。後世の人たちにはこんなことがあってはならないでしょ？戦争中だから、軍人の中にもいい人もいれば悪い人もいないじゃないですか。

当時、刀を抜かないでここ〔頭〕を叩かれて、〔血が出て〕服を破いたんですよ。濡れて脱げなくて、そんなふうになるくらい打ち付けたんですよ。13歳でそういう目に遭って、泣きもすれば、声も上げるでしょう？泣けば泣いたといって殴り、殴るのも平手で殴るんじゃない、拳でこう殴るんですよ。靴を履いたまま蹴るし。それもこれも、戦争中だからそうしたんであって、ひとりやふたりで性奴隷をつくろうとしてそうしたわけじゃないんですよ。もう日本政府も気づいて、本当のこと

を言って、謝るべきは謝って、謝ることがないならないとか、何か言わないと、15年もあれば山河も変わるのに、この間、何も言わないなんてことが許されますか？それは駄目ですよ。



証言する吉元玉ハルモニ（2008年3月31日、ウリチブにて）

生まれてから普通学校時代までのこと

—— ハルモニはお生まれになった年は何年ですか？

吉 辰年で、1928年生まれ。

—— お生まれになった月日は？

吉 住民登録は間違っていて、1927年生まれになっていますけれど、本当は28年生まれです。陰暦の10月23日。

—— ごきょうだいは何人ですか。

吉 きょうだいは、上に兄が2人、姉がひとり、弟がひとり、私を入れて5人きょうだいです。

—— ハルモニは学校には少し行かれたと聞いて

いますが、何年くらい通ったんですか？

吉 子どもの頃に、今では初等学校と呼ばれる学校〔普通学校、日本人用の小学校に相当、ただし義務教育ではない〕に少し通ったんですが、通ったといっても、途中で通えなくなったりしたから、2、3年通ったのかどうか。それでも、「慰安婦」でいた時に、軍人の中にはいい人がいて、私の故郷の両親のいるところの住所も調べてくれて、手紙の書き方も教えてくれて、それでひらがな、カタカナを少し覚えました。それで家に手紙を書いたことがあります。なのに、今では全部忘れてしまいました。

あの人がいなかったら家に連絡できませんでした。あの人がそうやって教えてくれて、私の書いたのをなおしてくれたりして、家と手紙のやりとりができました。あそこにいた時に、父が亡くなったことも、それで知ることができましたが、とらわれの身だったので行くことはできませんでした。

—— それは満洲にいる時ですか。

吉 いえ、中国です。

—— ひらがなを教えてくれた日本の軍人は将校でしたか。

吉 将校ではなくて、何か分からないけど、他の人は自分の欲だけ満たそうとするけど、その人はそうではなくて、可哀想だと言って慰めてくれて、いろいろ面倒を見てくださいました。

—— その人の名前を覚えていますか。

吉 無理ですよ。日本の字も全然読めないし、日本語も全然話せないし、聞けない人間ですよ。解放されて帰って来てからも、あまりにも生活が苦しかったので、何も考えられませんでした。それに、私は「慰安婦」にされたことを隠しているから、韓国人は大韓帝国万歳と叫んでいたけど、私はどうすれば自分の身が人目につかないように生

きていけるか、そればかり考えていたんですから。—— 普通学校に通ったときには韓国語だけを学んだのでしょうか。

吉 あの時韓国語の文字と言葉だけ勉強して、工場に行けば技術を教えてくれる、技術を教えてお金も稼げるようにしてくれるって言うから、それに騙されて、そのまま行ってしまったから、韓国語の文字もきちんと学んでいないし、まして日本語は、授業時間が1時間だったか、多分1時間あったと思うんですが、何を習ったか思い出せません。梁 では、普通学校に通っているときに慰安所に連れて行かれることになったのですか。

吉 いいえ、父が古物商をしていたのですが、盗品を買って、そのせいで拘留所に捕らえられました。そのことで私は学校に行けなくなりました。—— 先生は日本人でしたか。

吉 韓国人でした。

梁 日本人はひとりもいませんでしたか。

吉 いなかったと思います。70年も経っているんだから覚えていませんよ。

—— 先生は男性でしたか、女性でしたか。

吉 先生は全員男性だったと思います。

父のこと

—— お父さんは古物商をなさっていたということですが、具体的にはどんなものを売っていたのですか。

吉 今でも、今は何て言うんだろう。泥棒した人が売ったものを買って、売った人も捕まるし、買った人も捕まるでしょう？

梁 普段はどういうものを扱っていたのですか。

吉 古物商というのは普段は、ナベとか、下駄箱とか、ありとあらゆるものがありますよ。それで、品物が良かったから父が買ったみたいなんです。それで、それを買ってしまったために刑務所に

入ったんです。だから学校に行けなくなったんですよ。

今でもここに古物商というのはあるはずですけどねえ。名前は、今は古物商じゃなくて質屋って言っていると思います。

—— 大きなお店でしたか。

吉 大きな店ではありませんでした。あそこからここまでの半分くらい〔ウリチブの居間の半分くらい〕の大きさだから大きくはないでしょ。

—— 使用人はいましたか。

吉 使用人はいなくて、ひとりで、品物が入ってくれば買って、それを売って、そうしました。そこでは買うだけではなくて売りもしますから。そこでちょっといい品物が安く入ったからそれを買ったようです。それで刑務所に入って苦勞をすることになって、私たちは学校にも行けなくなり、厳しい生活になったわけです。

だまされて軍慰安所へ——誘拐される経緯

吉 だから、金も稼げるし、工場に就職させてくれるし、技術も教えてくれるというから、両親にも言わないで、誰にも言わずについて行って本当に……。

—— 工場で技術を教えてくれるといったのはどういう人が？

吉 60代くらいのおばあさんでした。でも、今だったら80代の人でも、あんなに年寄りには見えないと思いますよ。当時で言えば60代くらいの人です。

—— 韓国人でしたか？

吉 韓国人だから、韓国語だから通じたんですよ。日本語がひとつも使えない時の話ですから。

—— 具体的にはどういう仕事をすると言われたのですか。

吉 何の仕事というよりも、ただ工場の仕事すれば、お金ももらって、いい技術も教えてくれるか

ら、技術を学んで月給ももらえるのはいい話だと言われて、まんまと騙されたのよ。そこに行ってみたら、工場ではなくて、小さな部屋に閉じこめて、「大きな声を出したら怒られるよ！ 騒いだら殺されるよ！」と、これだけ言って、その人はいなくなったんですよ。その後からは軍人たちが入って来るんですよ。13歳の子には耐えられませんかよ。だから泣きもし、大声を上げもしました。すると、泣くからといって殴り、大声を上げたといつて殴るんです。大声を上げたら外から見たこともない人が入って来て、「お前、こっちに来い」と言って連れ出されて怒られる。だから恐くて声を上げることもできずに、じっとしていました。そしたらまた部屋に連れ戻されて、それからまた軍人が入って来るんです。

軍人の性的暴行と性病罹患

吉 ですから、あまりにも幼い子どもに無理なことをさせたせいか、横根^{よこね}という性病〔鼠蹊リンパ節が腫れる〕にかかりました。人と接触できなくなって、手術をされると言われたんですが、なかなか治りませんでした。その手術の時に、性病の手術だけしたのではなくて、女性の一生を台無しにされたんですよ。卵管を縛ってしまって、子どもができないようにしてしまったんです。だから、それこそ、あのときにそんな身体になってしまったんですよ。病気は治らないし。

あの病気だけ手術したのなら、もしかしたら後からでも子どもが産めたかもしれないのですが、子どもが産めないように卵管を縛ってしまったので、あのときに完全に身体が駄目になってしまったんです。お腹ばかり4回も手術することになったんですから。

梁 その後ですか？ その当時に？

吉 その当時は横根の手術といって卵管を縛って

しまったんですが、卵管を縛ったために妊娠できないから悪い菌が腫瘍になって、卵巣腫瘍で手術したし、また盲腸でも手術したし、子宮を全部摘出する手術もしました。胆石の手術もしました。4回も手術しました。

—— 軍人の相手をさせられたのは満洲に行くからですね？

吉 満洲が中国、中国が満洲ですかね？ 手術したのは満洲だと思います。

—— おばあさんはどこまで一緒に行ったのですか。

吉 満洲まで、あのおばあさんが行ったと思います。とにかく韓国人はその後は見たことがありません。その人も見なかったし。

梁 満洲までは行ったんですね。

吉 満洲まで行ったかな、汽車に乗せてからいなくなったのかな、それもよく思い出せないんですが、とにかくそこに行ってから韓国人は見たことがなくて、軍服を着た人しかそこにはいなくて、民間人は見たことがありません。

ところがこれ〔性病〕が全然治らなくて、ご飯を食べさせるのももったいないくらいになつたので、人をひとりつけて家に送り帰したんです。

帰郷と二度目の誘拐

吉 家に帰ってからしばらくして、治ったのかどうかわかりませんが、病気が治ったとって私は仕事に出始めました。家からずいぶん離れたところに日本の部隊があったんですが、朝早くから人がいっぱい並ぶんですよ〔「ナラベル」と日本語で発音〕。そうして並んでいると、前の方からこれくらいのがついたこういうの〔ベルト〕をくれるんです。それをもらえれば、中に入って掃除をしたりとかできるんです。それがもらえなければ入ることもできません。毎朝、早朝からそこに

通ったんです。病気が治ったから通ったんでしょう。

しばらく通った頃、一番最初に私を工場に行かせてあげると言った人がまた現れたんです。とにかくこっちに来いと言うんです。何も言えずにそのまま行きました。東平壤と西平壤の間に家があったんですが、その人は私を東平壤に連れて行きました。その人を見たら恐くて私は何も言えずにただついて行きました。ついて行ったら、今度は満洲じゃなくて、中国に行きました。

どこに行くのか、聞くこともできませんでした。恐くて、そのままついて行ったのが中国でした。そこもついて行ってみたら、民間人はいなくて、軍人しかいないところでした。

私は泣き虫と言われるくらいよく泣いたようです。よく泣くので、泣くといって叩かれ、悲鳴を上げたといって叩かれ、痛いから痛いと言を上げるでしょ。そうすると叩く。そんなふうに辛い日々を送るうちに年齢的に、15歳過ぎた頃に生理を迎えました。生理がなんなのかも分からなかったので恐くて、ひどくされて血が出たんだと思ったんです。そしたら女性が月々するものだ。だからといって客を入れないわけでもないし。そうして入れて、床が真っ赤になっても許してくれないんですよ。洗う暇もないんです。終わったらすぐに洗わなければならないのに、洗う暇もないんです。そのくらいひどい目に遭わせておいて、認めてくれないなんて……。

満洲の慰安所について

—— 少し前に戻ります。最初に60代のおばあさんに連れて行かれる時にお母さんは何かおっしゃいましたか。

吉 いいえ、そのおばあさんと私とで話し合ったことで、大人たちは何も知らなかったんですから。

大人たちが知っていたら、あんなことにはならなかったでしょう。大人たちが知らないからそのまま幼いなりに、技術も教えてくれてお金も稼げるというからついて行ったんですよ。

—— 満洲の慰安所には経営者のような人がいましたか。

吉 その主人かどうかわかりませんが、管理する人だから、部屋に入って来て怒って引っ張り出したりしたんでしょう。その人が管理人だったんですよ。

—— それは日本人でしたか。

吉 日本人じゃなかったから朝鮮語ができたんでしょう。騒ぐな、という朝鮮語が、日本人ならあんなに上手くは言えないでしょう。

—— 朝鮮人の可能性が高い？

吉 朝鮮人だと思うし、そこに出入りする人は民間人はとにかくいなくて、軍人だけが出入りしました。

梁 でも、管理する人は朝鮮人ですか。

吉 はい、その人だけが。その人が入って「出てこい！」とわめくと、他の部屋に連れて行かれて、とにかく怒鳴られるんです。

—— その慰安所には女性は何人くらいいましたか。

吉 分かりません。何人かは覚えていませんが、何人かいました。何人かは分かりません。

—— そこでは何と呼ばれていましたか。

吉 そこで付けられた名前は、私の名前が「吉元玉」でしょ。そこでは「ヨシモト(吉元)ハナコ」。「ヨシモトハナコ」と付けられました。

ところがその名前を、韓国に病気を治すために帰って来て、何ヵ月経ってからか、何年経ってから分かりませんが、その名前は忘れなかったんです。ヨシモトハナコという名前を忘れなかったんです。ですから、中国に連れて行かれて、「お

前の名前は何だ！」と怒鳴られると、初めのうちは「ウォノクです、ウォノクです」と小さな声で答えましたが、また怒鳴られて「ヨシモトハナコです」と言いました。それで、そこでもヨシモトハナコと呼ばれました。

—— 満洲の慰安所には名前がついていましたか。

吉 それは、名前も分かりませんが、飛行場から遠く離れていたということだけ〔思い出します〕。

梁 なぜ飛行場から遠く離れていたと思うんですか。

吉 飛行場から遠く離れていたと思うのは、私を手術した医者が日本に行くと、飛行機に乗って行くと言ったんですよ。その時に遠いからそこには行けないと言っていたので。

病気も治ってないのに、医者が飛行機に乗って行くというので、それにそこは遠いところだと言っていたので……。

—— そこはハルビンですか。

梁 そこはハルビンと言っていましたか、ただ満洲と言っていましたか。

吉 満洲というのは、私が帰って来てから自分の苦勞を話したのであって、そこが満洲だったのか、ハルビンだったのか分かりませんよ。

梁 ハルビンという言葉は聞いたことがありますか。

吉 ハルビンという言葉は、ここに来てから聞きました。

梁 当時はどこにいるか分からなかったのですか。

吉 そうですよ。満洲がどこだか、ハルビンがどこだか、分かりませんよ。幼いのが問答無用で……。欲が深いと罪をおかすって、お金を稼がせてくれるって言うからただついて行っただけだから、何が何だか分からないのよ。

—— 慰安所のあった場所は市街地でしたか、それとも田舎でしたか。

吉 山の中だったと思います。こういうところだったら、人が行き来するのを見ることができたはずですが、全く見ませんでしたから。

間もなく横根という病気にかかったんですが、あまりにもいじめられて、営業ができなくなると思ったからでしょう、カレット [가래트, 横根] がこんなふうにできて、だから怒られるのが恐くて、ご飯もろくにもらえないし、本当に苦勞しました。その苦勞だけが思い出されて、殴られた記憶なんかも忘れてしまったくらいですから。

—— 両方にできたんですか。

吉 そうです。両側にできました。本当に傷が大きくて、今でもその傷は大きく残っています。

—— 手術をした医者は軍医でしたか。

吉 そうだと思います。私服を着た人は見られませんでしたから。軍服を着た人で、手術をした人が白衣を着ているのも見た記憶がありません。

あれだけ手術していれば、それでもここまでの身体にはならなかったのに、そのときに卵管を縛って、子どもが産めないようにしてしまったんです。

だから80過ぎまで生きてきても、人間らしい生き方は1日もしていないんですよ。両親、家族とは13歳のときに別れたきりですし、8・15解放後は行こうと思えば行けたのに、あんまりみすぼらしいので行けなくて、南朝鮮でお金を稼いでから行こうと思ったのが、そのまま今日まで行けなくなりました。最初の頃は南北統一していたので、行き来できたのですが、あっという間に38度線が引かれて、行ける人も、来られる人もいなくなりました。だから今日まで消息も分からないし、南でひとりで暮らして来たんです。「慰安婦」にされた人間はただ苦勞しただけではなくて、人生

の痛みと孤独を抱えて生きてきたんですよ。

中国本土の軍慰安所から帰国

—— 2回目に中国に連れて行かれたのは、中国のどこでしたか。

吉 ナマチャン [남아창] だかソッカジャン [석가장, 河北省の石家荘か、ただし石家荘は内陸の都市で、海港はない] だか、それも今は具体的にはわかりません。私が船に乗ったのがソッカジャンなのか、ナマチャンなのか。

梁 ナマチャンという言葉聞いたのですか？

吉 何も思い出せないんですが、どこに行って来たのかと聞くので、無意識に私の口からナマチャン、ソッカジャンという言葉が出たんですよ。ここで「慰安婦」に行って来た人がいる、というときには、取材する人たちが、そこに行って歩くんですよ。その人が本当にそこに行って来たんだなというのを確認しないと、認めてくれないのですよ。それがないと、正体が分からないから、解放されて出てくる時に、ナマチャンかソッカジャンか分かりませんが、そこから船に乗って仁川に来たんですから。

—— その町からすぐに船に乗れたんですか。

梁 慰安所のあったその町からすぐに船に乗れたんですか。

吉 いいや、そこからすぐに乗ったんじゃないくて、ずいぶん歩いてから船に乗ったんですよ。その船に乗るのも、日本人が負けてから自分たちはいなくなつて、私たちは捨てられたんですよ。ご飯もないし、何も無いところに見捨てられたんですが、何日かして、多分そこに残った米粒が何かできつとご飯を炊いて食べていたんでしょう。ところが窓から、こういう窓じゃなくて、こういう窓だったんですが、窓から外を見ていたら、人が通って行きながら「早く行かないと、この船に乗れなかつ

たら故郷に帰れないぞ」と、そう言うのが聞こえたのですよ。だから無我夢中でそこら辺にあるものを履いてそのままついて行ってみたんですよ。行きながらその人たちの話を聞いてみると、この船に乗らなかつたら故郷には帰れないって言っているのですよ。それでとにかくついて行っただけです。

梁 それは朝鮮語だったんですか。

吉 日本語ですよ。日本語だったけど、韓国人は韓国人ですよ。

梁 韓国人が日本語で？

吉 はい、韓国人が日本語で「この船に乗らなかつたら故郷には行けない」って。だからそのままついて行っただけです。その人たちの列に入っていたら、切符を持った人がありがたいことに譲ってくれたんですよ。そうして着の身着のまま、古い履物を履いて、船に乗ってから何日かかったのか、何ヶ月かかったのか分かりませんが、仁川に到着しました。そのとき、腸チフスだか、コレラだか、とにかくそんな病気があって、船を海に停めたまま外に出してくれませんでした。2週間後にやっと外に出してくれました。

船から下りるときに300ウォンだったか3000ウォンだったか国がくれたお金があって、それとおにぎりをひとつくれたんですよ。それから周りを見ると、今ではああいうのをトラックって言うんだけど、そういう車があって、人々がその車に乗り込んでいたんですよ。だから私もとにかくその車に乗りました。ですから、本当に奇跡ですよ。そんなふうにして着いたところがチャンチュンダン奨忠壇公園。ソウルの奨忠壇公園に着いたんです。その当時は以北〔北朝鮮〕に行けるんですけど、どうやって行きますか？ 女性は毎日身体を洗わないといけないのに、船に乗って来てずっと身体も洗っていないし、着替える服もないし、どんなに恥ずかし

いか。

そんなところに前払いで服もくれるし、化粧品もくれる、1ヵ月にいくらずつくれる、そう言われたのでそのままついて行っただけです。そうして、お金ができれば服でも買って故郷に行くつもりだったのに、38度線が引かれて行けなくなってしまったんです。

その後は本当に寂しくて、ひどく苦勞しました。30歳過ぎて、子どもでもいたら忘れられるし、寂しさも少しまぎれると言われて、養子をもらったんです。連れて来て育てた子が今50歳ですが、仁川で牧師をしています。結婚して娘が生まれ、息子が生まれましたが、母親がこんなふうに分を育てたことを知っているのだから、あまりにもありがたいと、恩返しをしようって、女の子をひとり養女にして育てています。4歳の時に養女にした子が今、小学校6年生になりました。3人の子と夫婦、5人家族が仁川で暮らしています。

妓生巻番（妓生養成所）について

梁 妓生巻番にも通ったと聞いたことがありますか。

吉 それは、平壤で。平壤で幼いときに、初等学校に通えなくなって、友だちについて巻番に行きましたが、ほんの少し通っただけです。今でも、西道は少しできますけど、南道はできません。南道ソリ専攻と西道ソリ専攻があります。私は平壤で西道を習ったんです。でも、もう忘れちゃって……。

ですから、学校も少し通ってやめて、巻番も少し通ってやめて。だからきちんと学んだものが何もないんですよ。

梁 巻番はなぜすぐにやめることになったのですか。

吉 そこもお金がかかるから。

解放後の生活

吉 私は生活力があるんです。南の地でたったひとりなのに、「お金貸して」と言わずに生きてきたんですから、80過ぎるまでそうやって生きてきたんですから。たとえお金がなくても、死んだ後で悪口を言われるような人になってはいけない、親戚がいたり子どもがいたりすれば私の代わりに返してもらえるけど、私は生きるのも死ぬのもひとりだから、悪口のたねを作ってはいけない、そう思って生きてきました。電気も節約して使って、水を使うときも少しだけ出してあまりたくさん使わない、そんなふう生きてきたんです。

富川^{フチョン}でも長く暮らし、仁川でも長く暮らしましたが、人に後ろ指さされるようなことはしないで生きようと、本当に頑張りました。牧師をしている息子もそれを知っているので、お母さんは絶対に浪費は駄目だから〔と言います〕。土曜日には迎えに来て礼拝が終わると連れて来てくれるんですが、子どもたちに「ハルモニの前でこういうのを捨てたら駄目だよ、怒られるよ」(笑)。

中国の軍慰安所で

吉 過ぎた話はおしまいにして、今後の話を少ししましょう。

—— いや、過ぎた話をもう少しお願いします。中国の慰安所の名前は覚えていますか。

吉 「トキワ」〔常盤、常磐、または常葉、登喜和か〕。

—— トキワ？

吉 はい。

—— トキワには経営者、管理者がいましたか。

吉 管理する人がいました。管理する人がいたから、何か少しでも気に入らないことがあるとひどく叩かれたりしました。

—— それは日本人でしたか、朝鮮人でしたか。

吉 日本語ばかり話してはいたけど、朝鮮人のような気もするし。あそこでは日本語でだけ話して、朝鮮語は使わないから。だから日本人だと思っていましたが、実際、日本人なのか、朝鮮人なのか、確かなことは分かりません。

梁 日本語しか使わなかったのに、なぜ朝鮮人だったかもしれないと思うのですか。

吉 だから、日本語だけ使っていても、ひどいことをする時には「チュゴ！〔死ね！〕」とか「ホンナ！〔怒るぞ！〕」とか言うときには朝鮮語を使ったりするんです。そういうときに、もしかしたら朝鮮人かなと思ったんです。

—— その管理人の名前はわかりますか。

吉 わかりません。

—— 奥さんはいましたか。

吉 女はいますよ。男の方は何日かに1回見るかな。女が私たちにご飯をくれたりして、男の方は何日かに1回来るんですよ。

梁 では、「チュゴ！」とか「ホンナ！」とか言ったのは女性ですか。

吉 「チュゴ！」とか「ホンナ！」とか言っていたのは女です。

—— では管理人は女性だったんですね。

吉 そうです。女です。

—— トキワには「慰安婦」の女性は何人くらいいましたか。

吉 何人くらいいたのか詳しくは分かりません。

—— 「慰安婦」の女性たちは全員、朝鮮人でしたか。

吉 「慰安婦」も日本語ばかり使って韓国語は使わないんですよ。だから一緒にいる人たちは韓国人に間違いないと分かりますが、少し離れたところにいるだけでも、その人が韓国人なのか、日本人なのか区別はつきません。解放される時

で、私自身も間違いなく朝鮮人なのに日本人に見られるように一生懸命努力していましたから。

梁 ハルモニご自身が？

吉 私自身が。

梁 中国で？

吉 そうです。

梁 それで先ほど船に乗ろうとする人たちが日本語で話していたけど朝鮮人だと思ったと？

吉 そうです。日本語でしゃべりながら歩いているけど、朝鮮人なのかどうかも分からずついて行ったところ、韓国人に間違いなかったから、結局仁川に来たじゃないですか。3 ヶ月かけて、吉元玉という人間が今日まで生きて来られたのは奇跡だと思います。到底ありえないことだと思ったりします。

—— 中国に行くときは汽車で行きましたか？

吉 2回とも汽車で行きました。満洲に行くときも汽車で、中国に行くときも汽車で行きました。今だから、豆満江を渡って行ったと分かるんであって、当時はそれも分からず、「こっちに來い」と言ったあの人に2回目について行くときには恐くて、どこかに連れて行って殺すつもりかな、と怯えながらついて行ったので、何も考える余裕がなかったんですよ。

あの人はいつ、どこでいなくなったのか、いなくなって、他の人が話しかけてきて、その人について降りたんです。小さな部屋に入れられて、騒いだら痛い目に遭うよ、またそう怒鳴られたことしか……。平壤では粟飯を食べていましたが、そこに着いたらほうれん草のおつゆに米のご飯をくれました。

梁 それは最初に行ったときのことでですか？

吉 はい、最初に行ったとき。私自身がこんなありさまなのに、私を満洲に連れて行った人は途中でいなくなったけど、最初は満洲に連れて行った

人が、今度は満洲じゃなくて、どうして中国に連れて行ったのか、それが疑問です。どうしてあの人はあんなことをしたのだろう？ 最初に満洲に連れて行ったなら、また満洲に連れて行くはずなのに、なぜ中国に連れて行ったんだろう？ 行く途中で自分はいなくなって、顔も知らない人にあの女が……。私もちょっと足りないですよ。その人に来いと言われてついて行ったんですから。また、そのおばあさんがどこに行ったのかを、聞きもしなかったんですから。

梁 2回目に行ったときも両親は知らなかった？

吉 知りません。「ハナコ、こっちに來い」とその人が呼ぶので、その人の声を聞いただけでも震えてしまって……。

梁 その人はハナコという名前を知っていたんですか。

吉 その人がその名前をつけてくれたから。

梁 満洲に行くときに。

吉 満洲に行くときに、そこに行ってからヨシモトハナコってその人がつけたんですよ。

梁 満洲で？

吉 うん、その人が満洲には一緒に行ったのよ。ところが、中国に行くときには途中でいなくなってしまって、どこに行ったか分からない。

全く奇跡ですよ。奇跡、よく生きて来られたもんだ。しかし、いくら幼いとはいっても、なんで私はあんなにバカだったんだろう。殺されると思いながら、死ぬなら家で死んでも、人について行って死んでも同じなのに、來いと言われたからといってなぜついて行くのかってことですよ。

—— 2回目に行くときに何かいい仕事があるといった話はなかったんですか。

吉 そんな話もなくて、ただ「ハナコ、こっちに來い」って。だから恐くて何も言えずについて行ったら、そのまま汽車に乗せられたんです。汽車に

乗って、その人が「ここに座れ、動かないでじっと座ってなさい」と言うから、そこにじっと座っていたんです。その人は3、4席離れたところに座っていたと思います。自分は3、4席離れたところに座って、私の隣に他の人を座らせました。その人が中国まで行きました。

梁 それは男性ですか。

吉 男性でした。そういうふうに着ていたんですけど、いつの間にか見えなくなってしまって、二度と戻って来ませんでした。

—— 中国に行くときに他に同じような少女が汽車に乗っていませんでしたか。

吉 最初に行ったときは、間違いなく3、4人が一緒に行きました。私の友だちもいましたし、でも、2回目に行くときは恐くてひとりで行ったんで、他の人がいるのかどうかも見ることができませんでした。ただ、その人がどこに行ったのかな、とそればかり気にして座っていました。アイゴー、どこに行って私を殺すつもりだろうって、そればかり考えていたのに、いつの間にかなくなってしまったんです。

軍慰安所、トキワについて

—— 2回目に中国に行ったときには、トキワにずっといたんですか？ 解放まで？

吉 トキワにだけいました。他のところには出たことはありません。

梁 そのトキワがあった町は分からない？

吉 だからそれがソッカジャンなのかナマチャンなのか分からないけど、そのふたつのうちのひとつですよ。

梁 なぜそう思うんですか。その地名を聞いたことがあるんですか。

吉 着いたところがそこ〔どちらかひとつ〕で、また出て来たところがそこ〔もうひとつ〕なんだ

けど、どっちがどっちか分からないんです。

—— トキワの場所は移動しなかったんですか。

吉 そこにだけいました。何年いたか分かりませんが、私が他のところに行ったのは、若い頃は声がきれいだったんです。喉自慢に参加するために1回だけ車に乗せられて他のところに行っただけで、あとは検診のために出たことがあるだけです。

—— 町に買い物に行くようなことはありませんでしたか。

吉 そんなことはありません。

—— トキワがあった場所は市街地でしたか。

吉 いいえ。

梁 それも山の中？

吉 市街地ではありませんでした。市街地だったら、そこら辺で何か買ったりもできたでしょうが、そういうものはありませんでしたから。あの〔満洲で〕日本語を教えてくれて、字も教えてくれた軍人が、白菜、塩、粉トウガラシ、ニンニク、こういったものを持って来てくれて、漬け方も分からなかったけど、キムチだと言って作ってあげたら、おいしいと言って喜んでくれました。あの人は本当にいい人でした。「慰安婦」の女だといって苛めるということがありませんでした。ところが私は薄情な人間で、その人の名前も覚えていないんです。

—— 部隊の名前も覚えていませんか。

吉 そんなのわかりませんよ。

—— 散歩で外に出ることはできましたか。

吉 散歩なんて、そんなもの、する暇がありませんよ。それができたら人間が暮らせるところでしよう。

—— でも、朝は軍人は来ないのでは？

吉 朝はその代わりに、少しでも時間があれば、休もうとしますから、寝ようと思うんです。外に出ることなんか、考えもしませんよ。

—— 1日に何人くらい軍人が来ましたか。

吉 それも思い出せません。

梁 票などは持って来ませんでしたか。

吉 票を持って来ても、すぐに主人、管理する人に渡さなければならない、自分で持っているわけにはいかないんです。ひとり来て出て行ったら票をすぐに渡さないと、タダじゃ済みませんよ。

—— チップをくれる軍人はいませんでしたか。

吉 いません。軍人からもらったものと言えば、そこには本当に小さなみすぼらしいベッドがあるだけでしょ？ それで可哀想に思ったのか、あの優しい人が毛布を1枚持ってきてくれました。

梁 ひらがな、カタカナを教えてくれた人ですね？

吉 はい。毛布を1枚持って来てくれて、足が冷えるときに使えと言って湯たんぼを持って来てくれました。ところがそれも下手に使って……。やけどがここに……。あんまり長い歳月が経ってもう思い出せないけど……。

とにかく、とにかくどこからどう見ても、私は愚かだったと思います。あの熱いもの〔湯たんぼ〕を、毛布の中にでも入れればいいのに、それをそのまま……。とても大変でしたよ。

—— 慰安所にいるときに契約期間が何年だとか、そんな話を聞いたことはありませんか。

吉 そんなものもない、契約なんて、そんな話が出るどころか、とにかく「来い！」って言って、汽車の中で他の人に引き継いで自分はいなくなったんですから、契約なんてあるわけないでしょ。

—— 慰安所にいるときに主人がそういうことを言ったことはありませんか。

吉 そんな話は尋ねもしませんでした。〔向こうから〕することもありませんでした。とにかくあそこでも泣き虫と呼ばれて、何かあれば私は怒られる子で、いい話なんか聞いたことがないです

よ。

検梅（性病検査）について

—— 性病検査は普段は慰安所の中でしたのですか、それとも外に出てしたのですか。

吉 1週間に1回ずつ必ずしました。

梁 どこで？

吉 外で。部隊なのか、病院なのか、病院のようにも見えなかったけど、とにかく私たちがいる家みたいな家じゃないところで、何曜日に行ったかそれも覚えていないけど、毎週決まった曜日に行っていたと思います。あの横根をやった後からは大きな病気はしていないと思います。

梁 今お話されたのは満洲の話ですか、中国の話ですか。

吉 中国。

梁 満洲では？

吉 あそこでは病気になったことしか覚えてなくて、検診のことは分かりません。

あの横根を治すときに注射、何て言ったかな、あの注射を受けたせいか、今でも悪い病気はないみたいです。あれは、3号……？ あ、606〔サルバルサン〕の3号注射。それを何かあると打られました。

梁 中国で？ 満洲で？

吉 中国で。満洲ではそういう薬がいいのか悪いのかも分からなかったんだけど、治療しても全然治らなかつたんです。全然治らないから家に帰って治療したんですが、帰ってからどれくらいしてからか、治ったんです。それから工場に……。

梁 日本軍の部隊じゃないんですか？

吉 それが工場なんです。その部隊の中に、朝に帯〔ベルト〕をもらって入って、夕方にはそれを返却して、お金をいくらもらったような

…….

梁 そこではどんな仕事を？

吉 ある日は掃除をしたり、ある日はあちこち拭いたり…….

梁 部隊の中に入ってみたら工場があったんですか.

吉 部隊、工場ではありません。朝入って夕方出てくるときにお金をもらったのかどうか今では思い出せないけど、でも、もらったと思います。常識的に考えて、出るときに麦飯をくれて、多分、そのときにお金もすこしくれたと思います。いくらかは覚えてないけど.

—— 606号注射は中国で性病が発見されたから打たれたんですか.

吉 どうして打ったのか、最初のはじまりは分かりませんが、私はいつも下っ腹のあたりが具合が悪かったんですよ。そういうときに、606号というのを打たれると全てが楽になるんです.

その606号というのを、私は富川にいるときにも調子が悪いと時々打ちました.

梁 富川ということは解放後ですね.

吉 そうです。解放後もしばらく〔打っていました〕.

梁 いつ頃まで？

吉 40代とか、50代かな？ 分からないけど、その頃まで606号を、下半身の具合が悪いときには、それを打つと良くなるんです.

梁 そのときも606号と言っていましたか.

吉 そうです。606号と言っていました.

—— ペニシリンは？

吉 ペニシリンは駄目です。そういうのは、下っ腹が痛いような時に打っても全然効きません。あの606号というのは日本のものですが、あれは私の身体にはすごく効き目がありました.

2回目の連行

—— 2回目に中国に連れて行かれたときに、英文の証言によると、ハルモニは歌が上手なので中国に行って歌を歌ったらお金がたくさんもらえると言われて平壤の駅に行ったと書かれています。これは違うんですか？

吉 喉自慢というのは、若い頃は声がきれいだったんです。だから、中国にいる時に喉自慢に出たんですよ.

梁 そうじゃなくて、歌を歌ったらお金がもらえると、そういう話はなかったんですか.

吉 それは、満洲に行くときだったか、中国に行くときだったか、何が一番得意かと聞かれたので歌が得意だと答えました。そう言ったら、ああそれじゃあ、あそこに行ったら歌を歌っただけでもお金がたくさん儲かると言われたように思います.

梁 それは最初に行ったとき？ それとも2回目に行ったとき？

吉 2回目だと思います.

梁 あの恐いおばあさんに言われたのですか？

吉 あの人じゃなくて、横に座った人.

梁 横に座った男が.

吉 はい.

梁 他にもその男と話した内容で覚えていることはありますか.

吉 いやあ…….

梁 吉さんはそのとき、殺されると思って恐かったんですよ？

吉 2回目に「ハナコ、こっちに来い！」と叫んだ、あの人と一緒に汽車に乗った時には本当に恐かったですよ。またああいうところに連れて行くのではないかと思ってすごく恐かったんですけど、隣に座った人と多分何か話したんだと思うんです。そこで何が一番得意かと聞かれて、歌が得

意だと言ったら、その人が歌がうまいならそこではお金をたくさん儲けられると、そう言ったと思います。

梁 それを聞いて少しは安心しましたか。

吉 安心はできなくて、あの人〔おばあさん〕の方ばかり見ていたんですけど、いなくなったらもっと不安になりました。

—— その男の人は慰安所まで行っていなくなつたんですか。

吉 そうです。

梁 そこからは女主人。

吉 そうです。多分、私を満洲に連れて行ったおばあさんが、私の隣に座ったその男の人に、私が歌が上手いって言ったみたいです。それで、何が得意かって聞かれて、得意なことは特別にないと答えたら、歌が上手いそうじゃないかって。そういうやりとりをしたんです。

解放後の生活

—— 解放後の話を少しお聞きしたいのですが、ひとりで生きていくのが大変だったということですが、どんな仕事をしていたのですか。

吉 歌を歌いました。

梁 最初にした仕事が歌を歌うことですか。

吉 そうです。韓国に出て来て服や化粧品は前借りできるということで、歌を歌ったり、お酒をついだりして生活しました。

梁 酒場で？

吉 そうです。

梁 それを何年くらい？

吉 それを多分、何年かな？ しばらくそれをしながら生活して、お金も貯めて、万物商会〔よろずや〕といってもいいくらい、メリヤス、既製服、化粧品、こういうのを売る店をやったのが30歳くらいの時だから、18歳で解放を迎えて帰って来て、

10数年は飲み屋で働いたと思います。

—— 酒場ではどんな歌を歌ったのですか。

吉 酒場で歌う歌が別個に指定されているわけではなく、私が知っている歌、以前に覚えた歌、そういうのを全部そのまま必要に応じて歌いました。

梁 西道〔パンソリ〕も歌いましたか。

吉 ソリもしましたよ。飲み屋ではお酒を飲みながらソリもするし〔パンソリも歌うし〕、普通の歌も歌うし、とにかく世の中の人が歌う歌は全部歌いましたよ。

梁 日本の軍から習った歌などは？

吉 あそこでは歌はひとつも習わなかったの、声がきれいで、ここからあっちの方まで人がずっといて、こっちの方で誰かが歌い出したとしても、真ん中にいてその歌を全部受けて歌えるので、うまいぞ、いいぞ、というお囃子のような声も出てきて、そんなこともありました。今ではもう年をとってしまって……。年をとったというよりも、手術をするたびに声が変わって、4回目の手術で完全に男のような声になってしまいました。

—— 声ももっと高かったのですか。

吉 高い声も出ましたし、低い声も出ましたし、自由に、聞く人たちに合わせて声を出すことができました。自由自在でした。

—— その仕事はお金がたくさん稼げましたか。

吉 飲み屋で働くときは、最初に入るときに、1ヵ月に3万ウォン、1万ウォン、5千ウォンというふうに決めて入るから、それ以上はもらえませんが、客が気分がいいとくれるチップが結構な金額になりました。

—— 声がきれいで、美人でもあったと思うので、男の人から求婚されたりすることはありませんでしたか。

吉 ずいぶん言われましたよ。でも、もうそうい

うことに嫌気のさしている人間なので、また、自分自身の身体がボロボロなのが分かっていますから、それはできませんでしたし、しません。いくらそういうことを言われても……。新しい女性が来たと言え、男たちがたくさん現れます。でも、ひとりのものになってしまうたら商売にならない。だから、しません。できません。

悪い人は飲み代を出さずに帰ってしまうの。すると、飲み代を出してと言って追いかけるの。そうしたら、昔はトラックの後の荷台に乗せられるのよ。そうすると、その荷台にぶらさがって、ここで殺せ、死んだ方がまだ、と。そうして車にぶら下がると、仕方なく車を停めて、降ろしてくれる。

梁 お金は？

吉 もちろん、お金をくれなかったら[降りない]。とにかく必死にしがみつくだから。私は1万ウォンで契約したら、1万ウォン分の仕事をしないと気が済まない。私の性格では、他人に損をさせることはできない。他人に損はさせられない。

梁 自分の収入ではなく、その店の収入のために？

吉 そうですね。それをもらわなきゃ。もらわなかったら店が損するんだもの。もしもその店で私が契約した分だけの働きをしていないと思っていたら、私は何日か余分に働いてからその店を出たんですよ。そのまま出て来たことはありません。そういう真っ直ぐな精神を持って生きて来たから、神様が可哀想だと思ったのか、晩年に、80歳過ぎて、こんなふうにと対協に来て、ここに来て楽に暮らせるようにしていただきました。普通の果報者ではないと思います。本当によくしてくれます。

被害者の申告について

—— 申告されたのが他の方たちよりも遅かったようですが、どういう気持ちで申告されたのですか。

吉 私は、私自身を隠そうとして、一緒に暮らす家族にも絶対に知られないようにしていました。ところが、テレビで水曜デモをするのを見て、そのときも、なぜ恥ずかしいとも思わずに顔を出してあんなことをしているのかと思いました。ところが、うちの嫁が勘が鋭い子で、「どうみてもお母さんはおかしい、言ってください、子どもに秘密を持つのですか」と。それで、その嫁が対協に、赤十字に、テレビ局に連絡したんです。そうして出てくることになったんですが、でも、出てこようかどうか迷っていたら、家の近所には全然出歩くこともできなかったんですが、高齢者たちだけ連れて済州島に行くと、同じような経験をした人たちがばかりで行くから大丈夫だと言うので行ってみたら、そこに1回行ってみたら、本当にそこは平和の国のようにでした（笑）。

対協の職員たちがあまりにも優しくてありがたい人たちで、出ないわけにはいきません。本人たちも恥ずかしいのに、あの若い人たちが出て来てあんなふうに闘ってくれているのに、もう私はボロボロでもう回復できないような人間が何を隠そうとするのか、出て行ってあの人たちと一緒に闘って、今後は私たちのような人が出ないようにしなければならない、戦争のない国、平和な国、私たちのような人が出ない国をつくらなければならないと思って、闘わなければならないと。今はアメリカから来いと言え、どこでも呼ばれば行きます。学校で来いと言われれば学校に行って学生たちに話します。勉強すべきときには勉強して、国に必要な人になって戦争のない国をつくれと言ってきます。

それでも去年までは、どうすれば隠せるか、そ

ればかり考えていました。でも、今は違います。去年から変わったのは、人々がこういうことをありのままに知ってこそ、いざというときに少しでも被害を減らせると思ったからです。

おわりに

—— 長い間、貴重なお話ありがとうございました。

吉 良い本を出して、多くの人に知らせてください。本当に戦争のある国では私たちのような目に遭う人が必ずいます。戦争のときにはどうしても人の心がすさみます。だから、同じようなことが起きるんです。ですから、本当に戦争のない国、平和な国をつくらなければならないので、早く、世界に知らせて、日本と私たちとで〔この問題を〕終わらせるためには、今からでも遅くないので、なかったことを新たにつくり出してやれと言っているわけではないので、ありのままに言ってくれて、私たちに謝るべきは謝り、賠償すべきは法的賠償をすればいいんです。賠償したからといって私たちの身体が蘇りますか？ そんなことはありません。私たちはボロボロになったけれど、これからは戦争のない国になって、こんなことがないように。

それにしても、一言もないんですから。あまりにも無視しています。人の上に人はいないので、人を無視してはいけません。私たちがみんな死んだらこの問題が終わると思って、じっとしているようですが、私たちが死んでも絶対に終わりませんよ。私たちにだって子孫がいるんですから。小学生が来て「ハルモニ、元気を出して、私たちがいるじゃないですか」と言うんですから。そんなときには私たちも元気が出ます。ですからまた出て行くことになるんです。隠さずに話すことになるんです。これ以上、世界的に恥をかきたくなければ……。これは恥だと思わないと。

戦争がなければあんなことは起きません。日本人が特別な性暴力者なわけではないんですから。戦争中だから、今日死ぬか、明日死ぬか分からないから、女たちを見ると自分の欲求を満たそうとするんです。満たせないと暴力を振るったりしたんですよ。戦争中でなければ、あんなことは起きないということです。だから早く謝罪し、賠償しなければならいんです。私たち被害者はもう何人も生きていません。それでも生き証人がいる間に終わらせないと、後の世代にまでこの問題を引き継ぐわけにはいかないじゃないですか。

(中央大学名誉教授、日本現代史)